

サルナシ、玉川大も注目

藍匠 十日町の取り組みを視察

園（柳幸雄社長）に22日、玉川大学の農学部環境農学科・石川晃士教授（43）と同科4年の鈴木貴久さん（21）が訪れ、サルナシを活用した地域振興について学んだ。藍匠は平成元年（1989）からサルナシ栽培に取り組み、現在は約3畝で5千本を栽培する国内有数

の規模。サルナシは疲労回復や強壮ささらに皮膚、肺がんなどの抑制効果があると見て岡山大学が発見し、スーパーフードとして関心が高い。

玉川大学は、2015年から名称の共通点『玉川』をきっかけに福島県石川郡玉川村と連携、2017年には包括連携協

定を結び、産業振興や教育、まちづくりなどの分野で長年にわたり協力。2016年には芸術学部の学生が玉川村の特産品でもあるサルナシのパッケージやプロモーションビデオを作成するなど地域課題の解決に向けた活動を展開。農学部でも同村の特産品の一つであるサルナシを活かした地域振興策を探るなか、同村からサルナシ栽培の十日町市の紹介を受け、今回訪問。石川教授と鈴木さんは「どのような商品を作っているのか。十日町のサルナシと玉川村のサルナシとの違いは」や「栽培や販売で課題となっていることは何か」などを尋ねた。

同社は荒廃地を開拓、樹木を植える取り組みを紹介。豪雪対策で枝が折れないように鉄筋を立てサルナシを縛り成長させ、雑草対策でそば殻を約10センチの厚さにまく。最初に鶏糞を撒き、農薬と殺虫剤は使わないことを説明。「うちのサルナシは品種改良をせず、野生種であるためサルナシの成分が濃い。農薬を使わないから安心安全な果実でもある。サルナシの葉を活用したサルナシ茶の開発や今は自社製のサルナシ酵素の開発を進めている」とし、「均一に熟するのが難しい時があった」などと答えた。

群馬県高崎市出身で実家が梅農家という鈴木さんは「玉川村の活性化につながるヒントを得たい」と思ってきた。雪国ならではの栽培方法など多くを学ぶことができた。内容をまとめてサルナシサミットで発表し、サルナシを盛り上げる力になれば」と話した。

同社には、これまでも全国の農業関係者や研究者らが視察に訪れている。柳社長は「若い人が興味をもってくれることが嬉しい。サルナシには様々な効果があり、多くの人に知ってもらいたい」と話している。



サルナシで地域振興をと玉川大から農園見学（22日）

十日町市で先駆的にサルナシ栽培に取り組み六箇の藍匠・魚沼山菜農

同社は荒廃地を開拓、樹木を植える取り組みを紹介。豪雪対策で枝が折れないように鉄筋を立てサルナシを縛り成長させ、雑草対策でそば殻を約10センチの厚さにまく。最初に鶏糞を撒き、農薬と